

氏 名（本 籍）	知野 文哉(熊本県)
学 位 の 種 類	博士(文学)
学 位 記 番 号	甲第116号
学位授与の日付	令和3(2021)年3月25日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条
学 位 論 文 題 目	土佐明治維新史とその歴史意識の形成 ー坂本龍馬を中心にー
論 文 審 査 委 員	主査 青山忠正(佛教大学教授) 副査 麓 慎一(佛教大学教授) 副査 斉藤利彦(佛教大学教授)

## [1]論文の概要

本論文は、土佐(土佐山内家)の明治維新をめぐる歴史意識が、明治期以降に、どのような勢力によって、どのような意図に基づいて形成され、それが一般社会にどのように広まったのかをテーマに、「坂本龍馬」を主な対象としつつ、テキストの読み込み、その著述・編纂の経緯や、意図の検証といった、いわゆる文献考証の手法によって考察したものである。その構成は次の通りで、序章および全3章全11節と終章から成る。

### 序章 第一節 本稿の分析視角

#### 第二節 土佐明治維新史の修史事業について

#### 第三節 史料焼失問題と修史事業の限界

#### 第四節 土佐明治維新史研究史と平尾道雄

#### 第五節 本稿の構成について

### 第一章 坂崎紫瀾と土佐明治維新史の形成ー「汗血千里の駒」を中心にー

#### 第一節 坂崎紫瀾と土佐明治維新史の枠組みの創出

#### 第二節 「汗血千里の駒」の枠組み

#### 第三節 自由民権運動の中の「汗血千里の駒」

#### 第四節 武市グループ三部作の完成ー「南山皇旗之魁」ー

### 第二章 瑞山会と土佐明治維新史の形成ー瑞山会諸士伝を中心にー

#### 第一節 瑞山会以前の土佐殉難志士顕彰

#### 第二節 瑞山会とその顕彰活動

#### 第三節 瑞山会諸士伝の考察

#### 第四節 瑞山会諸士伝に於ける坂本龍馬伝の形成

#### 第五節 瑞山会諸氏伝による歴史意識の形成

### 第三章 坂本龍馬伝に於ける伝説形成の過程ー「船中八策」を中心にー

#### 第一節 「船中八策」論の前提

#### 第二節 「船中八策」の成立

### 終章

序章では、これまでの土佐明治維新史の修史事業と、それに関わる研究史を述べる。高知藩では明治初期に旧藩政史料の焼却処分を命じており、それが当該期に関する実証研究を進める際のウイークポイントとなった結果、歴史編纂は個人の所蔵史料や記憶に頼らざるを得ず、旧武市半平太グループを中心とする瑞山会が編纂した『維新土佐勤王史』(1912 年)を、唯一のまとまった文献と位置付けるほかない状況が近年に至るまで続いた、としている。

第一章では、土佐明治維新史の語りの嚆矢となった、坂崎紫瀾の新聞小説のうちでも、坂本龍馬を主人公にした『汗血千里の駒』(1883 年 1～9 月、『土陽新聞』連載。以下、『汗血』)を検討する。なお、坂崎は高知のジャーナリストで自由民権の運動家でもあった。

坂崎は『汗血』において、土佐の明治維新への胎動を、武士階級内部での身分差別に対する、軽格(下士)たちによる封建制度打破に向けた人権闘争ととらえ、明治 10 年代の自由民権運動を、その発展した形態とする。すでに死亡した武市半平太、坂本龍馬、中岡慎太郎らを、自由民権運動の先駆者と位置付け、板垣退助、後藤象二郎に、その後継者として、自由民権運動を担う主体たる正嫡性を与え、さらには当時、洋行に関わる資金の出所問題で批判の渦中にあった二人を救済しようとする意図に立つものであった。ところが、この『汗血』は 1883 年末以降、雑賀柳香(反自由党の改進黨に近い)により、単行本化される際、坂崎の意図に反して、坂本のストレートな伝記に再構成され、版を重ねて一般に流布するに至る。これにより、土佐の明治維新の発祥が、土格(上士)と軽格(下士)との対立に淵源を持つ、という基本的な枠組みの部分だけが、再生産されることになった。

第二章では、瑞山会による殉難志士に対する顕彰活動と修史事業について考察している。瑞山会とは、かつて武市半平太を中心に活動したグループのメンバーが、中央政府の官僚政治家となった後、旧同志中の死没者に対する顕彰活動を契機に結集した組織(1884 年 3 月発足)で、中心は田中光顕(1843 生～1939 没)であった。同会が編纂した『維新土佐勤王史』(1912 年)は、現在に至るまで土佐の明治維新史をめぐる言説のベースとなってきた。

瑞山会の活動は中央政府土佐閥として、薩長閥に対抗しつつ、我こそは維新の主役という立場から、土佐の経歴を主張し、自らのアイデンティティを確認しようとしたものである。彼らは、その意図のもと 1880 年代から 90 年代にかけ、死没者の靖国神社合祀、また位階追贈などに尽力した。その編纂になる瑞山会諸氏伝は未刊ながら、1900 年前後(明治 30 年代)から宮内省編纂『殉難録稿』の種本となり、国家公認の「正伝」へと昇格する。その過程で坂本龍馬も自由民権運動の先駆者から、薩長盟約と政権奉還の立役者に上昇させられ、明治政府誕生の功績が土佐のものであることを証拠立てる存在として、改めて強調されるに至る。

第三章では、坂本龍馬の最大の功績と言われてきた、政権奉還の原案にあたる「船中八策」が史料として、自筆原本はもとより、写本すら存在しないものであり、明治期以降に創作された文書であることを論証した部分であり、本論文の白眉ともいえる。

すなわち、その初出原形は、坂本の血縁者である弘松宣枝の『坂本龍馬』(1896 年)に見える建議案十一箇条である。それが坂崎紫瀾『少年読本 坂本龍馬』(1900 年)で八カ条に整えられ、さらに宮内省編纂『殉難録稿 54 坂本直柔』(1907 年)に建議案八条として掲載されるに及んで、国家公認の文書となり、文部省維新史料編纂官岩崎英重(土佐出身)編の『坂本龍馬関係文書』(1926 年)に収録されて、「史料」としての正当性を獲得した。

しかしながら、弘松にしても何らかの記録に依拠して十一箇条を書いたわけではなく、坂本家に伝わる伝承に基づいた叙述であり、それに続く諸書は、瑞山会はじめ土佐関係者の政治的な意図を色濃く反

映したものであった。この「史料」は、戦中から戦後に至り、郷土史家平尾道雄の著作などを通じて、「船中八策」の名称とともに広く知られるようになった、とする。

終章では、本文のまとめと、『坂本龍馬関係文書』編纂以前に立ち戻った姿勢で、一次史料に基づいた再検討を行なう必要があろうとする展望が述べられる。

## 〔2〕審査結果の要旨

本論文は、おおむね以上のような内容を持つ。その考察の時期的な対象は明治10年代から昭和初期に及び、取り上げられる文献は、公刊・未公刊を問わず、きわめて広く渉猟され、また考証の過程は緻密であり、論理の飛躍や矛盾などは見当たらない。

したがって以下では、本論文が積み残した課題というより、本論文の成果が、広く学界に向けて発信していると見られる諸問題について、口頭試問での質疑応答を踏まえながら、5点にわたって、まとめておきたい。

第1に、坂崎紫蘭と自由民権運動とのかかわりについてである。坂崎『汗血千里の駒』における坂本龍馬像は、板垣、後藤に自由民権運動の正嫡たる地位を与えるために書かれたという本論文の指摘は、その検討が1883年(明治16)『土陽新聞』連載の原本に基づいたものであることと相まって強い説得力を持つ。坂崎は『汗血』の導入部に、井口村刃傷事件(文久元年<1861>3月に起きた土格と軽格との対立抗争事件)を置き、これを軽格による封建制度への反抗として、自由民権運動の源流と位置付ける。

しかしながら、土格と軽格との間に厳格な身分差があったことは、どこの大名家中でも同様であり、土佐に固有の現象ではない。これを以て土佐の自由民権運動の源流と位置付けるのは、歴史的な事実の解釈としてかなり無理がある。むしろ、坂崎は板垣、後藤を弁護するために詭弁の論陣を張った、と見る方が自然かもしれない。そうだとすれば、坂崎は、なぜそこまでして民権運動の興隆を図るのか、という民権運動の中での坂崎の立ち位置が、さらに検討されてもよいのではないか。なお、『汗血』単行本化の際、雑賀柳香の関与の仕方も今のところは不可解と思われる。

第2に、上記の点と密接に関わるのだが、坂崎紫蘭と演劇について、である。坂崎は新聞記者であると同時に、演劇改良運動に携わる劇作家でもあった。明治期において一般民衆は文字媒体より、むしろ芝居や講談といった芸能を通じて、「歴史」を受容する傾向が強かった。実際、1887年(明治20)には、高知市内で坂本龍馬を主人公とする芝居が上演され、人気を博したというが、そこに登場する井口村刃傷事件の場面での龍馬を描いた藤原伊之助画の役者絵も、近年では発見され、公開されている(太田記念美術館、2010年3月期展覧会)。坂崎は演劇を通じて、土佐の歴史を人々に語り伝えようとしたのかもしれない。

このような新たな手掛かりをもとに、民権運動の展開と、それにとりまう土佐の維新史をめぐる歴史意識の一般民衆への浸透は、より具体的に検証することが可能なのではないか。

第3に、本論文の主要なテーマである土佐明治維新史にまつわる「歴史意識の形成」の具体的な内容はどうか、という問題があろう。その「史実」が書物のなかに描かれることはそれとして、「歴史意識」として、一般国民の間に、どのようにして浸透してゆくのか。

1897年(明治30)頃以降、宮内省編纂『殉難録稿』で、瑞山会諸氏伝に描かれた坂本龍馬をはじめとする志士たちの伝記は国家公認の「正伝」となるが、媒体としては冊子体(分冊)で、その配布先は限られていた。その内容が、広い意味で一般国民の間に定着するには、拡散させるための媒体の活用と、一定の時間の経過とが必要になろう。ちなみに冊子体の内容に「修補」が加えられ、宮内省編『修補 殉難録稿』全3巻として公刊されるのは、1933年(昭和8)である。また、『坂本龍馬関係文書』にしても、日本

史籍協会叢書に収められて公刊された当初(1926 年)、その配布先は原則として協会員及び帝国大学図書館等に限定されていた。このような、ある「史実」が「歴史意識」として拡散される際の媒体と、その拡散経過に関わる検討は、今後の課題たりうるであろう。

第 4 に、瑞山会の活動が、中央政府の土佐閥として担った政治的な意味ないし役割についての理解である。瑞山会の組織的な結成は 1884 年(明治 17)3 月とされるが、その首領たる田中光顕は翌年 7 月、内閣の創設(12 月)に先立ち、初代の書記官長に就任し、1898 年(明治 31)～1909 年(明治 42)には第 3 代宮内大臣を務めるまでになる。土佐山内家中として低い身分(陪臣から脱藩浪士)出身の田中が、ここまで立身する背景には、強固な結束を保ち、維新における土佐の功績を声高に主張する瑞山会の組織力があつたと見てよいのではないか。この点の検討は、すでに本論文の考察の範囲を超え、明治中後期の政治史の課題であるが、これを考えるうえで、本論文の成果は大きな示唆を与えるものであろう。

第 5 に、「船中八策」の実在性に関する議論である。この点で第三章の考察は、現在の時点で閲覧できる限りの文献を博搜し、考えられる限りの考証を尽した結果であり、異論をはさむ余地はない。「船中八策」という文書は実在しないことが明らかになった。

ただ、「船中八策」の作成者、すなわち「政権奉還」の発案者、坂本龍馬という言説が、明治末～大正期以降の社会に、違和感なく受け入れられていったとすれば、その前提に、「政権」という言葉ないし概念が、一般的なものとして流通していたという条件があつたことが考えられる。

現代の研究水準に即していえば、慶応 3 年(1867)の將軍慶喜による「政権返上」の際の「政権」は、大名に対する領知宛行権と理解すべきである。それを將軍が放棄し、天皇に帰属せしめるからこそ、徳川家も一大諸侯に降ることになるのだ。ところが明治末期以降、世代交代が進み、1860 年代の言葉の本来の意味が忘れられる一方で、現実の政治世界では内閣交代による政権移動が頻繁に生ずるに至り、「政権」は、政治的な執行権を意味するようになったと見られる。つまり「政権奉還」は、現実の政治世界の政権交代と重ね合わせる形で、抵抗なく理解されるようになっていたのであろう。ちなみに、第 1 次護憲運動のもと、「大正政変」により、第 3 次桂太郎内閣が倒されるのは 1913 年(大正 2)2 月で、『維新土佐勤王史』刊行の翌年、やがて初の政党内閣として原敬内閣が成立するのは 1918 年(大正 7)であつた。

その意味において、「船中八策」及び「政権奉還」に関わる龍馬伝説の形成には、同時代の言語を取り巻く政治的あるいは社会的な環境の変化と関連付けた理解が、今後は求められるものと予想される。補足として付け加えれば、司馬遼太郎の描く竜馬は、現代社会を背景に置いた文字通りの現代ドラマであり、「大政奉還」を大きな画期としながら、その歴史的な意味は全く理解されていない。

以上の諸点は、先述した通り、本論文にとっての課題というより、今後において、学界が広く共有すべき課題と見るべきであり、その意味では、本論文がもたらした成果の確認といったほうが適切ともいえよう。これらの諸点を総合して、本論文は博士(文学)の学位を授与するに相応しいものと判定する。